

ワレモノ注意! ——美術の世界の「ワレモノ」たち

2023年6月29日(木) - 9月3日(日) 会場: 常設展示室

※月曜休館 ただし、7月17日(月・祝)、8月14日(月)は開館、7月18日(火)は休館。

※開館時間 9:30-17:00

※学芸員によるギャラリートーク 7月1日(土)

2人の学芸員による普段着ギャラリートーク 7月23日(日)、8月27日(日) いずれも午後2時より



われのすけ

ももとの体の半分近くが割れちゃったけれど、直してもらって今の姿に。ピンチもチャンスと思える明るい性格。ワレモノのことはわれのすけに聞こう。



No.11

樂宗入作・樂了入補
《赤樂茶碗 銘老菜子》

ひびひこ

とあるおうちで大事にされていたけれど、ヒビが入っていることに気づいてしょんぼり……。ちょっと内気でおとなしい性格。



ひびひこ、元気ないな～。そうだ! 一緒にいろんなワレモノを見に行こうよ!

どれがワレモノ?

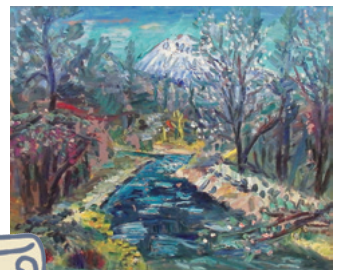
割れちゃうものといったら、やきものとかガラスとか……?



ぼくよりもっと
ヒビだらけ……?



あれ?
油絵だよな?



火にかけて
お湯を沸かすよ



墨を磨るときに
使う硯だよ



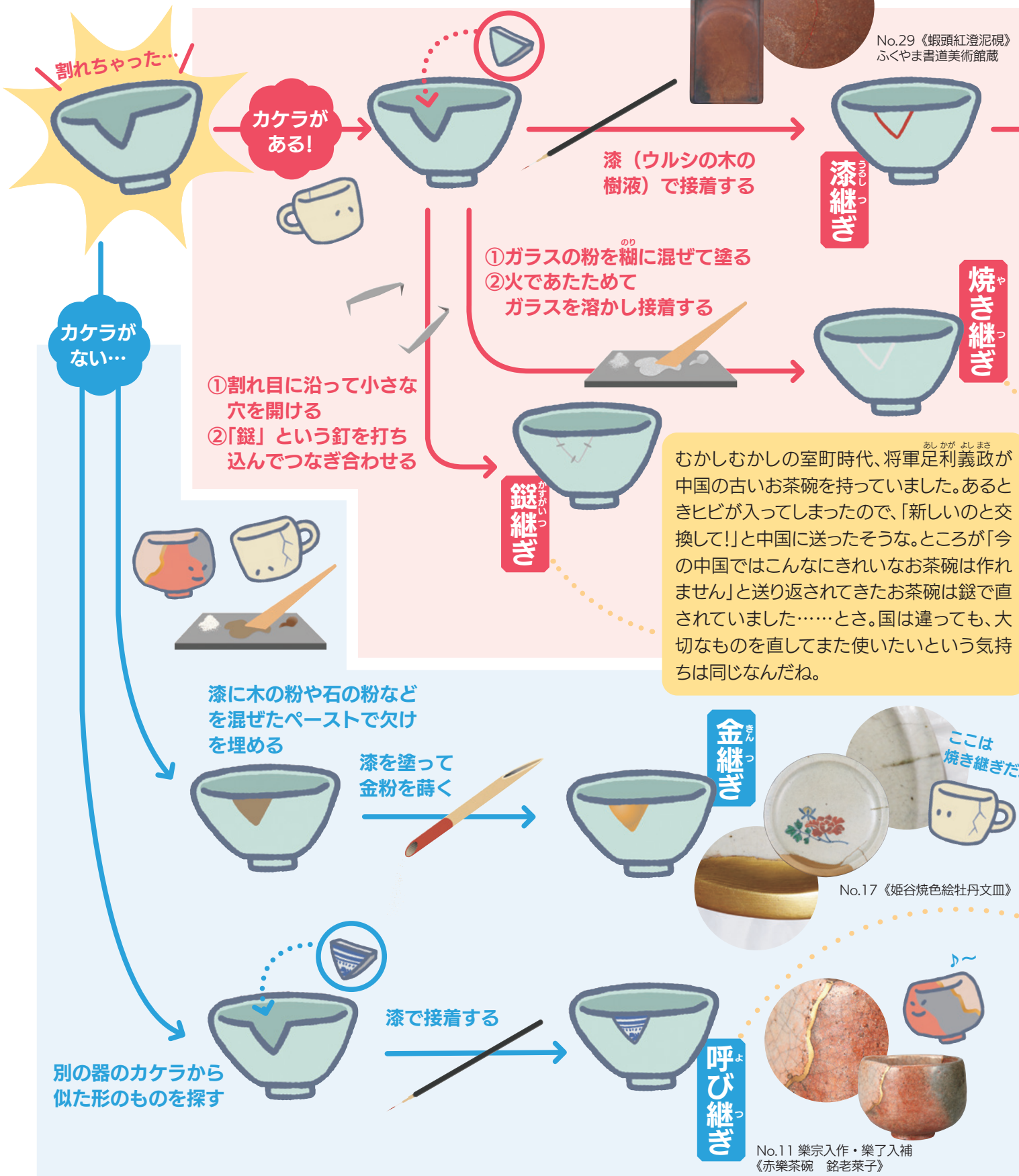
キンキラ!

答えは4ページに!





いろいろある！ ワレモノの直し方



継ぎ目に漆を塗って
金粉を蒔く



No.12 《斗々屋茶碗 銘深山木》



金継ぎ

「金繕い」ともいうよ。カケラを接着するだけなら漆継ぎで十分だけど、直した部分をわざわざ金で「お化粧」しているんだ。どんなに大事な器でも、うっかり割ってしまうことはある。割れちゃったことはすごく悲しいけれど、傷を丁寧に直してあげたら、きっとさらに愛着もわくよね。



「焼き継ぎ」は江戸時代後期に広まった修理方法だよ。器を新しく買うよりも、焼き継ぎで直すほうが安く済んだから、瀬戸物屋さんは商売あがったりだったんだって。

焼き継ぎ職人さんは、たくさんのおうちを訪ね歩いてワレモノを預かり、一度にまとめて修理してから、また元のところに戻して回ったみたい。焼き継ぎされた器の底には、文字が書かれていることがあるけれど、これはもしかして持ち主の名前かな……？



No.14 《呉州染付牡丹鳳凰皿》個人蔵



No.15 《染付蕪図蓋茶碗》個人蔵



No.16 《染付芙蓉手花鳥文碗》個人蔵

直したのはどこ？

割れた部分がわからないように直す方法を「共直し」といいます。もともとのカケラを使って、境目が目立たないようにきれいに継いだり、カケラがない場合は、欠けを埋めるためのパーツから作って復元したり。直した部分には、器の色や質感を再現するように絵具を塗ります。完璧に直されていると、一度割れてしまった器とはとても信じられません。金継ぎの例で挙げた《斗々屋茶碗 銘深山木》には、実は共直しも施されています。金継ぎのように華やかな直しもあれば、共直しのように、じっと隠れているひそやかな直しもある。手間をかけてでも、このワレモノをずっと大切にしたいと思う人がいたからこそ、いろいろな直しの方法が生まれたのです。

ぼくも呼び継ぎの一種！

ぼくを作ってくれたのは、樂宗入さんという人だよ。でも、よそ見して歩いていたから、うっかり転んで割れちゃった……。そしたら、宗入さんのひ孫の樂了入さんが、欠けたところにぴったり合うように、別のカケラを補ってくれたんだ。赤っぼいところが、宗入さんが作ったところ。うすピンクっぼいところが、了入さんが直したところ。どっちもあたたかくてきれいな色だし、2つをつなぐ金色の線がおしゃれでしょ？

絵具がはげて下地の色が見えている



もともとの器の肌

絵具を塗って、ざらざらとした質感を似せている



ぼくだってまだまだ！



どれがワレモノか、わかった?



ワレモノ!

やきもののお茶碗なので、もちろんワレモノですが、ヒビのように見えるのは、何かにぶつけてできたキズ……ではありません。焼きあがった器を熱い窯の中から出すと、外の空気との急激な温度差で、釉薬が一気に縮み、このようなヒビ(貫入)が入ります。ときには、使っているうちにお茶などが染み込んで、少しずつ目立ってくることも。貫入は、器として使われてきた歴史を物語る「雄弁なヒビ」なのです。

No.54 藤本陶津(2代)《白釉茶碗》



ワレにくいモノ!

硯は石でできていることがほとんどです。でも、この硯の素材はなんと木! 表面に漆を塗り、防水性を持たせることで、硯として使えるようにしてあります。小さなスマートフォンくらいのサイズですが、重さは80gと、スマホよりもずっと軽い。しかも、石に比べて欠けたり割れたりしにくいので、このような硯は、旅に行くときなどに重宝されました。

No.59 盧葵生《蟬様漆沙硯》ふくやま書道美術館蔵

この作品が美術館に来たとき、絵具の表面はバキバキに割れてしまっていました。画面からはがれ落ちている部分もあり、とても壁にかけられる状態ではなかったのです。でも、絵具の破片をひとつずつ、ジグソーパズルのように元の場所に貼り付けるといふ、気の遠くなるような手当てをしてもらって、ようやく展示できる状態になりました。絵だっけときにはワレモノなのです。



ワレモノ!

No.71 小林和作《春の山》



ワレモノ!

金ピカに光っているということは、もしかして金でできている……!? いいえ、実は、土を焼いて作ったやきものです。焼く前の最後の段階で、金を塗って仕上げています。でも、持ったときの感触は、「やっぱり金属でできているのかな?」と思うくらいの重量級!

No.56 西村九兵衛《甌口尾垂松梅地紋釜》

No.53 三輪龍作(12代休雪)《卑弥呼の書》



ワレモノを割らないためには、どうしたらいいの?

美術館ではこんなことに気をつけています

手袋は… 使わない!



大切なものを扱うときは手袋必須、というイメージがあるかもしれませんが、でも、手袋をはめると指先の感覚が鈍くなるため、かえって危ないことも。やきものやガラスなどのワレモノを手にとるときは、素手が一番安心なのです。



持ち手は… 持たない!

取手やつまみがあれば、ついつい持ちたくなるもの。ですが、こうした部分は、細くて弱いパーツのことも少なくありません。両手で下から支えるように、あるいは、器の内側と外側から両手で挟み込むように持つのがおすすめです。

じっくり見るときは… お布団の上で!

お布団といっても、美術館で使うのは「綿布団」。薄葉紙という和紙で綿をくるんで作ったものです。やわらかくて適度に厚みがあり、ワレモノにひっかかることもなく、しかも軽い! 綿布団の上なら、作品もリラックスして、いろいろなヒミツを教えてくださいます。



しまうときは… しっかり包む!

頑丈な箱に入れるのはもちろん、衝撃を吸収するクッションをきちんと詰めることも大切です。ここでも薄葉紙は大活躍。丸めれば緩衝材に。ぐるぐると巻けばワレモノの弱い部分を守る包帯に。作品の下をくぐらせておけば、取り出すときの持ち手になります。箱から出すときのこと、箱に入れたまま移動させるときのことを考えて、作品がぐっすり眠れるような梱包を考えます。



これでワレモノの持ち方、さわり方もバッチリだね!

